

織物の素材の全国分布

—裂き織りとの関連で—

福 嶋 秩 子¹

1. はじめに

裂き織りの名称サックリとその表すもの（指示物）の全国分布に興味をもち、分布図を書いて変化の過程を明らかにした¹⁾。その後、ツヅレなどの名称にも調査対象を広げた。また、中村ひろこによる三種のサキオリの分類²⁾は、古木綿布を裂いたものを横糸とする典型的なサキオリ以外に、麻や藤などの素材を横糸とするサキオリがあることを示したもののだが、表1のように、これに下位分類を加えて、「多様な裂き織り」の分布図を描いた。分布図から、木綿の導入以前に麻や藤などを横糸に用いた織物があり、サックリなどの名称で呼ばれていたことが示された^{3), 4)}。このことに関連して、日本の織物の素材の分布を知りたいと思い、『日本民俗地図』VIII衣生活⁵⁾を用いて調査したので報告する^{注1)}。なお、Excelでデータを整理し、ArcGIS online (esri社提供)を用いて地図化した。以下の文中の素材の説明には『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ）⁶⁾を用いた。

表1 多様な裂き織り⁴⁾

中村（1984）	縦糸（経糸）	横糸（緯糸）	福嶋 近刊
麻のサキオリ	麻、藤など	麻、オクソ、オワタ、藤、くずなど	裂き織りA
	麻、藤など	紙	裂き織りA'
木綿布のサキオリ	麻、藤など	木綿布を細く裂いたもの	裂き織りB
木綿糸のサキオリ	木綿糸	木綿布を細く裂いたもの	裂き織りC
	麻、藤など	木綿糸	裂き織りD
	木綿糸	木綿糸	裂き織りD'

2. 麻・綿・養蚕の分布

2-1 麻

図1参照。栽培したものを使う場合の他に、素材を買う場合にも記号を与えた（以下も同様）。麻を使うところは、北海道を除き、全国に分布しているが、関東などやや分布が少ない。日本海側や九州に密に分布しているところがある。麻綿（オクソ・オワタ）を買うところはあまり多くないが、耕作地が少ないためか島嶼部に分布している。麻糸を買うところはきわめて少ない。

2-2 綿

図2参照。綿を使うところは北海道に分布していない

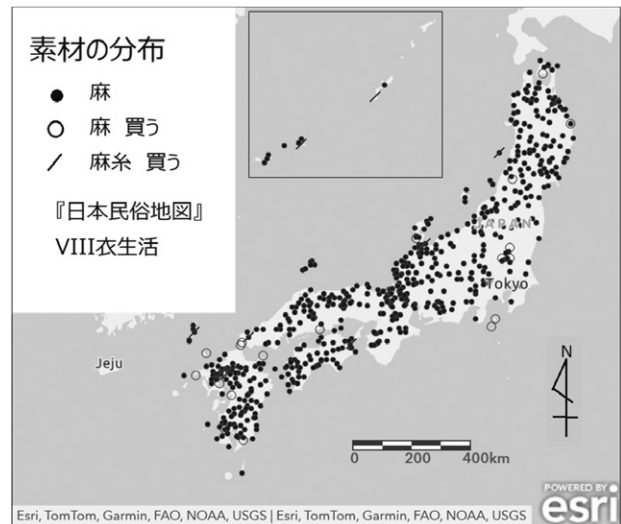


図1 麻

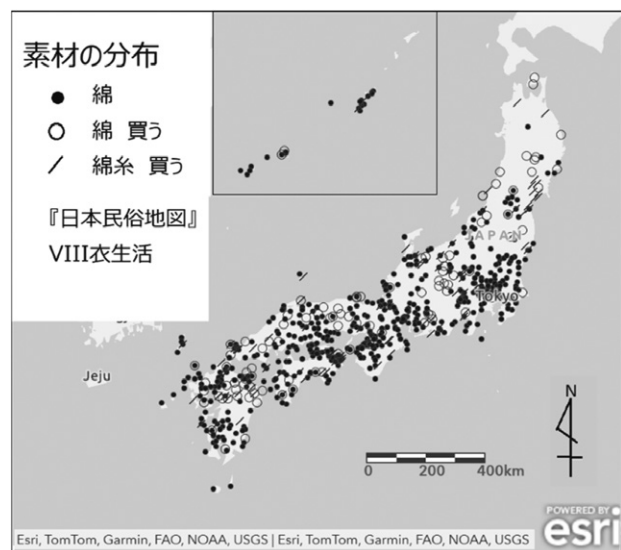


図2 綿

が、東北地方・北陸地方・長野県もあまり密ではない。寒冷地では栽培が難しいということであろう。東北地方での綿の導入は明治30年頃という情報もあった。綿を栽培しないところでは、綿（綿花や古木綿布）や綿糸を買っていたことが示された。

1 ふくしまちつこ 新潟県立大学名誉教授 〒950-0813 新潟市東区大形本町2-3-29



図3 養蚕

2-3 養蚕

図3参照。養蚕すなわち繭の利用は、麻・綿の中間の分布を示す。特に密に分布しているのは、関東地方と、その周辺の東北地方南部、中部地方などである。繭や絹糸を買うのはそれぞれ一地点のみで、ほとんどない。

3. その他の素材の分布

3-1 ふじ (藤)

図4参照。ふじはマメ科のつる性落葉木本で、皮の繊維で藤布を織る。本州・四国に多数分布する。四国で藤で織った布をタフという。



図4 ふじ



図5 くず

3-2 くず (葛)

図5参照。くずはマメ科のつる性多年草で、皮の繊維で葛布を織る。本州・四国・九州に点々と分布する。九州北部ではカンネカズラという。

3-3 いらくさ (刺草)

図6参照。いらくさはイラクサ科の多年草であり、茎から繊維をとる。北海道から東北・北陸地方に分布する。東北地方にアイ(コ)、アエコ、アカダ、アココなど、北陸地方にエラソ(イラ(刺)+ソ(苧))という異名がある。

3-4 からむし (苧)

図7参照。からむしはイラクサ科の多年草であり、茎から繊維をとる。東北・北陸地方さらに本州・四国の一部に分布する。東北地方南部と新潟県にアオソ(青苧)、本州中部にアカソ(赤苧)とオロがある。



図6 いらくさ

3-5 しなのき (科の木)

図8参照。しなのきはシナノキ科の落葉高木であり、樹皮の繊維で布を織る。北海道は1地点であるが、いらくさと同様に東北・北陸地方に分布する。東北地方にマダという異名が分布するが、マダをウリハラカエデというカエデ科の落葉高木の樹皮の名称に用いるところがある。オオバボダイジ（大葉菩提樹）もシナノキ科の落葉高木で、樹皮の繊維を利用する。

3-6 こうぞ (楮) と紙

図9参照。こうぞはクワ科の落葉低木で、樹皮の繊維は和紙を作る材料であるが、織物にも用いる。東北地方を除く本州、四国、九州に分布する。四国にカズ・カジという異名がある。また、四国では、こうぞの皮で織ったものもタフという。図4のタフの分布と重なっていることが興味深い。

図9参照。紙を裂いて作った紙縫り（こより）を横糸として織る地点は、新潟・能登・瀬戸内・四国・九州に分布する。書き古しの紙や古い大福帳を裂いて使ったという記録があった。

3-7 ぜんまい (薇)

図10参照。ぜんまいはシダ類ゼンマイ科の夏緑性多年草である。若芽の綿毛を綿の繊維に撚り込んだ糸を横糸に、綿糸を縦糸に用いて織ったものをぜんまい織りといい、東北地方西部で用いられる。

3-8 ぶどう (葡萄) といぐさ (蘭草)

図11参照。ぶどうはぶどう科の落葉性つる植物である。藤やくずと同様に、皮の繊維で織るのだろう。東北地方に分布する。

図11参照。いぐさはイグサ科の多年草である。通常茎を刈って畳表やむしろなどに使うが、織物にするところもある。東北地方に分布するが、岡山ではアラスという。



図8 しなのき

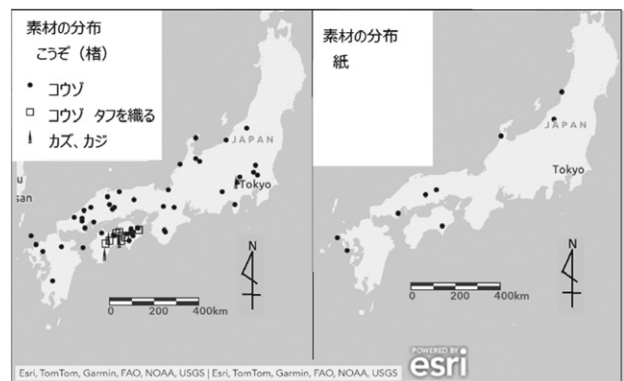


図9 こうぞ・紙

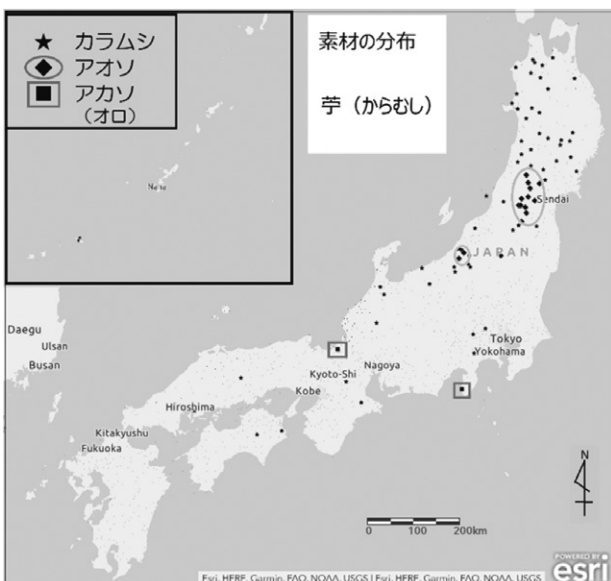


図7 からむし



図10 ぜんまい

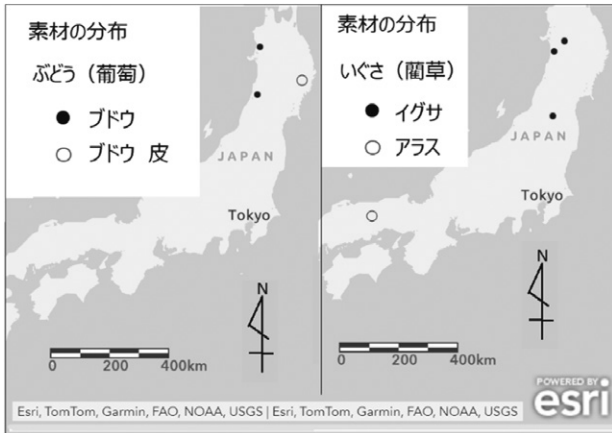


図11 ぶどう・いぐさ

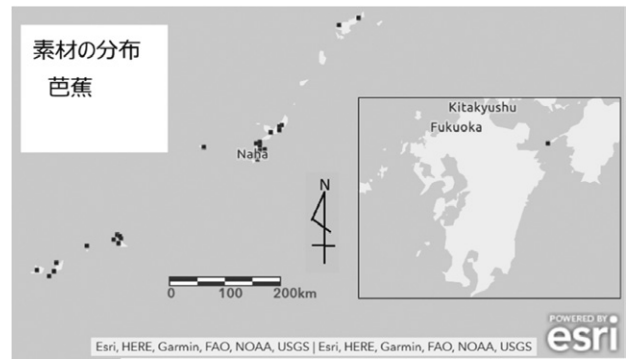


図13 芭蕉

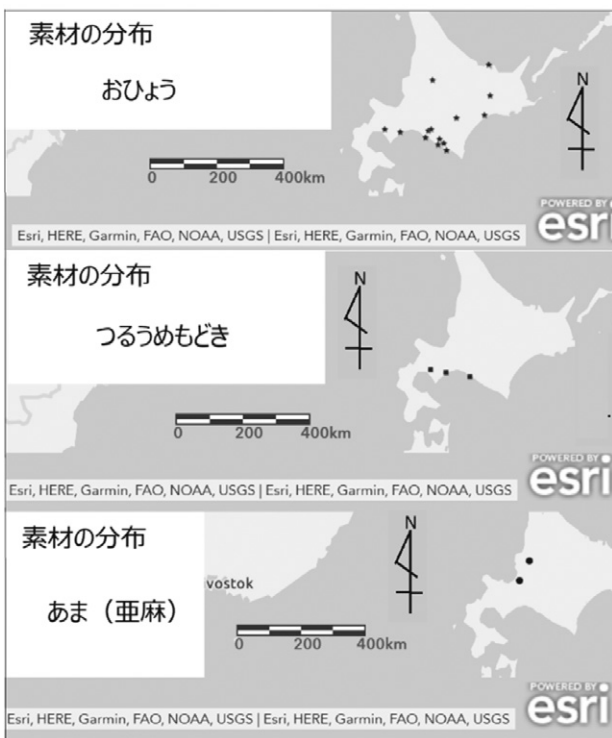


図12 おひょう・つるうめもどき・あま

3-9 おひょう・つるうめもどき・あま (亜麻)

北海道のみの分布を集めた図12参照。おひょうはニレ科の落葉高木で、樹皮から繊維をとる。アイヌの人々がアツシと呼ばれる上着を作るのに用いている。

つるうめもどきはニシキギ科のつる性落葉低木で、北海道に3地点ある。図4・図5で示されたように藤や葛が北海道にないので、この木の皮の繊維を用いるのだろうか。

亜麻はアマ科の一年草で、北海道に2地点ある。繊維用の栽培は明治時代に北海道で開拓使によって成功したのが最初だとされる。

3-10 ばしょう (芭蕉)

図13参照。ばしょうはバショウ科の多年草で、葉の繊維をとって紙や布をつくる。琉球列島に分布する。中国

原産とされるので、琉球に直接入ったとみられる。なお、四国に1地点ある。

4. まとめ

木綿導入以前の素材である、麻・養蚕による繭が綿と並んで広く使われていた。藤も広く使われていた。その他の素材として、いらくさ・からむし・しなのき・ぜんまいが北日本を中心に、こうぞや紙が西日本を中心に使われていた。また、北海道のみで使われている素材（おひょう・つるうめもどき・亜麻）や琉球列島中心に使われている素材（芭蕉）があった。

参考文献

- 1) 福嶋秩子; サックリの分布図を読む, 新潟の生活文化 29, pp.10-13, 2023
- 2) 中村ひろこ; サキオリの分布と分類ならびにその系譜, 月刊染織 a 34, pp.15-17, 1984
- 3) Fukushima, Chitsuko; How rip weaving spread in Japan: Interpreting maps of words and referents. In: Trinh Cam Lan et al. (ed.) Proceedings of the fifth International Conference on Asian Geolinguistics, Tokyo: Geolinguistic Society of Japan, pp.86-96, 2023 DOI: 10.5281/zenodo.8382130
- 4) 福嶋秩子; 裂き織り・サックリの分布図を読む——名称と指示物の分布, 多様な裂き織りの視点から——, 国立国語研究所論集, 近刊
- 5) 文化庁; 『日本民俗地図』VIII 衣生活, 1992
- 6) ジャパンナレッジ 『日本国語大辞典』
<https://japanknowledge.com/>
2024年1月31日アクセス

注

- 1) 本稿は、2023年11月5日に行われた新潟県生活文化研究会令和5年度年次大会における著者の発表内容の一部である。なお、本稿執筆にあたり、地図はすべて書き直した。